

伝えたかった想いをここに

大切な人へ

助産師 思春期保健相談士

後藤 敬子氏

第58回

ぼくの二十年間を

見てください

「二十歳を祝う成人の集い」でスーツを着たH君の誇らしい写真を見て、お母さんが語ってくれた。

H君は国内でも十数人しかいない疾患で視力がない状態で生まれ、すぐに腸の手術を受けた。その後何度も東京の病院で治療と手術を受けた。「なぜこの子だけ苦しまなければいけないの?」「なぜ私だけこんな思いをしなければならぬの?」H君の命のもしびがいつ消えるかわからない不安の中で、眠らずに看た時もあったが、孤独なお母さんを家族が救った。2歳違いの兄も甘えたいはずなのに健気に笑顔を見せ、お母さんの不在を補う夫や家族の優しさは落ち込みをやる気に変えてくれた。そんな中でもお母さんはH君を特別扱いせず、兄弟3人を一緒に育てた。父が仕事の時は安全に車いすが入れることを確かめるために

必ず下見に行った。公園も海も山も一緒に行つて、皆で笑ってきた。いつしかH君の兄も妹もお母さんを助け「大好きだよ」とそばにいる思いやりのある子たちになった。

病院では「奇跡の命」と言われ、全盲で知的障がいがあり全介助のH君を、はまなし学園の先生はできる子だからと「座れた!立ってた!歩いてみよう」と励ましてくれた。大変なりハビリもH君は笑顔で乗り越え、不可能だったことができるようになった。それはお母さんや周囲を奮い立たせる奇跡の力だった。小学校入学時に開設された特別支援学校では、成長を認めてくれる先生方との出会いがあり現在の生活につながっている。「この子は運がいいの」とお母さんは全ての出会いに感謝した。H君を生んだときは一生苦労すると思った。だけど20年の間にうれしさや感動がいっぱいで苦労を忘れ、自慢の息子だと涙ぐみ、帰りに「H君の母親になれて良かった」と誇らしい笑顔を見せた。

親と子が出会えた奇跡はお互いの誇りにつながる。素晴らしい20年間、おめでとうございます。

日本海と大地がつくる 水と命の循環

鳥海山・飛島ジオパーク

リレーコラム

図 交流観光課観光戦略係

☎ 26-57559

第125回

トビシマカンゾウの特徴と謎

ゼンテイカはススキノキ科ワスレグサ属の多年草で、栃木県の日光地域に多く見られることから、一般にはニッコウキスゲ(日光黄菅)とも呼ばれています。本州中部では標高1,000m以上の高山地帯にみられますが、東北地方や北海道といった冷涼な地域では海岸沿いに群落をつくることもあります。このゼンテイカ

トビシマカンゾウは異なる遺伝的特徴を持つことを明らかにしました。これにより、両者はその背丈や花の数だけでなく、その進化の過程が異なることがわかってきたのですが、なぜ佐渡島と飛島にのみトビシマカンゾウが生きているのかなど、新たな謎も生まれています。今後の研究の進展が期待されます。

6月はトビシマカンゾウの花期です。美しいトビシマカンゾウを見に、飛島まで足を運んでみませんか。

一種がトビシマカンゾウです。酒田市の花であるトビシマカンゾウは、離島特有の変種(島嶼型変種)とされ、これまで本州や北海道でみられるゼンテイカ類に比べて大きく、地面から花までの茎花茎が長いことや、多くの花をつける特徴があるとされてきました。近年、山形大学の笹沼恒男准教授の研究グループが、東北地方や北海道のゼンテイカ類と、佐渡島および飛島に自生する



一般社団法人鳥海山・飛島ジオパーク
推進協議会事務局
次長兼主任研究員
大野 希一氏



▲飛島のトビシマカンゾウ。飛島の人はこの花を塩漬にして保存食にしていた。